

火野葦平「花と兵隊」の基礎的検討

松本和也

I

日中間戦以降の文学場において重要な意義を担った火野葦平『兵隊三部作』は、三作品それぞれに異なる特徴・意義がある。

第一作「麦と兵隊」(『改造』昭一三・八)と第二作「土と兵隊」(『文藝春秋』昭二三・一一)とでは、日記体／書簡体という形式はもとより、その内容や受容にも変化がみられ、第三作「花と兵隊」(『東京朝日新聞』昭二三・一二・二〇夕／昭一四・六・二四夕／『大阪朝日新聞』昭二三・一二・二〇夕／昭一四・六・二七夕(休載含、全一三〇回))に至っては、虚構が謳われ、掲載メディアも大手新聞になり、前二作とは初期設定から異なる。

そこで本稿では、その重要性に比して論じられる機会が少ない「花と兵隊」をとりあげ、基礎的な検討を試みたい。具体的には、執筆企図や発表の楽屋裏などの基本情報を整理した上で(Ⅱ)、先行研究／同時代受容を批判的に検討し(Ⅲ)、初出／初刊単行本間の本文異同を確認すると同時に物語内容の分析を行うこと

で、研究のスタートラインを引くことを目指す(Ⅳ)。

II

まずは、連載予告「夕刊の新小説『花と兵隊』 戦争文学巨篇」(『東京朝日新聞』昭二三・一二・一六)から確認しておく。「作者の言葉」として、火野葦平による次の文章が掲載される。

この「花と兵隊」は時間的にいへば前に発表致しました杭州湾敵前上陸記「土と兵隊」と、徐州会戦従軍日記「麦と兵隊」の中間に位置する杭州湾警備駐留記であります、杭州は詩韻馥郁美しい街でした、殊に西湖の美しさは格別でした、戦火に見舞はれて空洞になった杭州はわれ／＼の部隊が入城し駐留してゐた五ヶ月の間に、春と共に目覚ましく復興しました、钱塘江の対岸や四囲にはなほ多くの敵を控へ、屢々討伐にも出で市内では便衣隊狩りも数回行はれましたが、われ／＼兵隊にとつて杭州警備の思ひ出はたぐひなく美しい西湖と、咲き乱れる桜や杏や木蓮などの花々と様々な支那街の風景と

その中にあるいろいろの支那人と艶麗なる姑娘と、その他さういふもの、中で先づ楽しいといはれる生活でした、それらの生活を敘しつゝ、戦闘と戦闘との間に坐つてゐる兵隊の姿、戦争と人間との関係、兵隊の見た支那の横顔、さういつたやうなものを謙虚な方法で探つてみたいと思ひます【広東にて】（全文、一一面）

ここでは、火野自身の体験に即して「土と兵隊」「花と兵隊」「麦と兵隊」という時系列が示された上で、杭州という街がクローズアップされている。もちろん、主語は火野も含めた《われわれ兵隊》であり、戦闘場面が書かれないわけではなく、西湖に代表される支那の風物や姑娘をはじめ中国人との交流——《先づ楽しいといはれる生活》が前面に押し出されていることは明らかである。それは、新聞社による次の紹介文も同様である。

今回、硝煙の中にあつて、文名高き火野葦平こと玉井軍曹は長篇「花と兵隊」を特に本社のために陣中で執筆、これまた近日の夕刊紙上より連載することになりました、既に発表された作品はいふならばいづれも単なる戦争実記でありますが、この「花と兵隊」は日記体でも書簡体でもなく、陣中初めて執筆する戦争小説であります、氏の素朴にして強靱な表現に漲る正義感と美しい親愛は鬼神も泣く壮絶なる皇軍の奮戦と、建設途上にある新支那の朗景を活写して余さず、戦争が鍛錬する純粹にして健康な人間の姿は、人々の心の隅々迄も揺り動かさずにはおかないであります、（一一一面）

ここでも、《皇軍の奮戦》という一句こそみられるものの、火野の前二作を《単なる戦争実記》と相対化した上で、「花と兵隊」

については《陣中初めて執筆する戦争小説》として、《新支那の朗景》と《純粹にして健康な人間の姿》がクローズアップされている。もちろん、従軍経験をもつ中村研一の挿絵が添えられる新聞連載である以上、いわゆる戦争らしさが「花と兵隊」にも付随されていくが、火野はそこから距離をとろうとしている。

後年の火野自身による、当時の執筆背景も参照しておく。

或る日、朝日新聞広東支局長の木下宗一氏がやつて来て、「花と兵隊」を朝日の連載小説としてぜひ書いてもらいたいという。むろん、それは本社の意向で、もし書いてくれるなら、原稿料は菊池寛氏と同じに出す、と、強硬である。私は考えた。まだカケダシの作家として、天下の大新聞朝日に小説を書くということは、なんといつても光栄だ。できるなら書きたいと思つた。しかし、菊池先生から、「花と兵隊」も「文藝春秋」といわれていたので、木下氏に率直にそれを伝え、菊池先生へお願いの手紙を出すから、その返事が来るまで待つて欲しいと申し入れた。私はすぐに飛行便で先生に、私の希望を打ちあげた。すると、折りかえし返事が来て、「君が檯舞台である朝日へ書きたい気持はよくわかるから、惜しいけれども「花と兵隊」はそちらへ譲る。しかし、そのあと、なにか書くならば、ぜひ「文藝春秋」にくれたまえ」とあつて、私は菊池先生の寛大な心がうれしくありがたかつた。

ここには、各メディアがこぞつて火野の原稿をほしがった当時の状況が伺える。事実、同じ時期に東京日日新聞（久米正雄）からの原稿依頼もあり、火野は「海と兵隊 広東進軍抄」（大阪毎日新聞）昭一三・一二・一九／昭一四・一・三〇／『東京日日新

聞」昭一三・一二・二〇タ、昭一四・二・一五」も同時並行して執筆することを余儀なくされた。もとより、人氣に応じた厚遇で迎えられる、「花と兵隊」は『一回の稿料三十円』⁽⁴⁾であった。

また、執筆に際しての火野の企図も確認しておこう。

新聞小説となると、これまでとまったく変つて来る。「麦と兵隊」「土と兵隊」はルポルタージュ的要素が濃厚であつたが、「花と兵隊」はフィクションをかなり入れて、純粹の小説にしてみようと私は考えた。もちろん、警備駐留生活における兵隊のルポルタージュは排することはできないが、西湖のある杭州の風物をふんだんに折りこみ、中国人や、姑娘^{クワンヤン}もたくさんに登場させて、人間の体温のふれあう美しい物語を書いてみたいと思つたのである。「略」検閲でやかましくいわれている兵隊と現地の女との接触、恋愛などがどこまで書けるか、その実験を試みたい野心もあつた。⁽⁵⁾

この帰結としては、この試みは挫折を余儀なくされた。

連載中、「語学について」の章で、河原上等兵と拱宸橋^{こうしんきょう}の仕立屋の娘鶯英との恋愛を書いたのだが、二人が仲よくなつて、河原が惚れた女と話がしたいばかりに、突然、支那語の勉強をはじめ、たちまち上達したという箇所に来たとき、大本営報道部から電報が来た。「コノカワハラトオウエイトイウクニヤントノコト、コレカラサキ、ドウナルカ」ソレガハツキリセネバ、アト、キョカセヌ」私はおどろいて、朝日を通じて、「コノフタリノコト、モウカカヌ」ヨロシクタノム」という返電を打つた。この程度のきれいな恋愛ですら、検閲にひつつかかるのならば、男女の問題を突っ込んで書くことな

ど思いもよらない。そこで、「花と兵隊」では、この二人の恋愛をはじめ、私と青蓮とのことも中途半端になつてしまつている。しかし、とにかく、書き得るギリギリの線までを表現することに努力した。⁽⁶⁾

それでも、戦場を舞台として、日本人／中国人、男／女の間係を書いたことは「花と兵隊」の特徴の一つであり、火野の作品史という観点からも、前二作で火野が書かなかつたモチーフがとりあげられており、重要な一步であつたことは疑い得ない。

しかもそれは、戦場で書かれる新聞連載小説ゆえに、楽屋裏では技術を駆使して時間との戦いが展開されていたようである。まずは、火野自身の回想によつて当時の状況を確認しておこう。

朝日の藤村安吉くんが「花兵係」で、原稿をとりに来る。できていないと「へいたい」編集室で、私が一回書きあげるのを待つて、大急ぎで帰つて行く。これは後で聞いて、相すまないと思つたのだが、毎日、原稿紙四枚の小説を無線電信で送るのは大変だつたらしい。普通の新聞記事ならともかく、小説であるから、句読点、行替、漢字と仮名など、原稿どおりにしなくてはならない。四枚として千六百字、これを全部片仮名で打つて、向こうであらためて翻訳するのである。しかも、広東からまつすぐ東京に行くのではない。いつたん上海支局で中継し、さらに台北へ、或いは大阪へ、ときには、長距離電話で送つたこともあるという。到着した片仮名文を翻訳する苦勞もなみたいではない。それはなかつた模様だ。⁽⁷⁾

そのことは、帰国後の火野を囲む座談会等でも、苦勞話として回想されていく。菊池寛・横光利一「火野葦平と語る3兵隊の不

満」〔『東京日日新聞』昭一四・一一・二二〕を引いておく。

菊池 東日は「広東進軍抄」、朝日は「花と兵隊」と、同時掲載で、君の方も苦しかったらうが、新聞社の方も困つたらしいね

火野 あれは困りましたネ、大変迷惑をかけました

菊池 しかし世界的迷惑だつたね

火野 あれは電報で送つたりして間違ひもあつたので、本になる時に切抜を新聞社から送つて貰つて訂正して出すことにしてをつたのですが、丁度私が海南島作戦に行つた留守に切抜が届いて間に合はなかつた

菊池 あれは毎日両方並べて書いてゐたのですか

火野 あつちを書き、こつちを書きしてをりました、書き溜めめといふことはなかく出来ないので、書き溜めして送らなければ御迷惑だらうと思つてゐたのですがとても出来なくて……（五面）

同様の事情は、火野葦平・三島正治・中山省三郎・進藤次郎・末常卓郎・竹田道太郎・菊池侃・櫻木俊晃「帰還の火野葦平にきく」〔『週刊朝日』昭一四・一二・三〕でも次のように語られる。

竹田 「略」締切は切迫してゐるし、片つ端から無線で送らねばならないといふので、もちろん十分に推敲して貰ふ余地もない、で一枚出来るとすぐ無線にまはすといふ没義道を敢てした（笑声）んですが、火野さんは兎に角すらくとして考へもせずに筆を運んで行かれる。あれで文芸作品が出来るのかたと、実は内心に思つたんですが、出来上つたものは実に立派なものなんです。その時

僕は、火野さんはペンを持つて紙に書かない時は、どんな仕事の時でも、行軍の時でも、常に頭の中で書いては消し、消しては書いてゐて、いざ紙に向ふと、すつかり構想が成つてゐてすらくといくんだと、実感感心してしまつたんです。（一二三頁）

もつとも、事後的な回想では雰囲気が異なるので、連載期間の《百三十日》が、朝日新聞関東前線本部にとつては、実戦に従軍するよりも遙かに苦しい毎日となつた》という、新円修三の回想（前段は前線本部長・木下宗一の話による）も参照しておこう。

火野は、毎日酒ばかり喰らつていたそうである。そしてやがて興が乗ると、やおらペンを執つて小説の執筆をはじめ。これが、いくらやかましくいつても、こちらの思い通りに書いてくれない。「略」やがて原稿が出来上ると、電送である。広東―上海―大阪とリレーする軍の無電を利用してである。

／全文をカタカナに書直して、大阪本社に打電するのであるが、人名や地名に、中国のそれが出てくるので、括弧して字の説明まで書き加えなければならなかつた。／大阪本社では、いま日中文化の主役を勤めている白石凡が、学芸部において、今度はカタカナ電報を、漢字入りの普通の文章に書き直す。漢電装置がまだなかつた時代だから、時間がかかつた。そいつを、さらに連絡部の電話に乗せて、東京に送つて来る。連絡部はまず速記者が原稿を速記にとつて、それから原文に書上げて僕のところへ届けて来る。僕は精読し、さらに疑問の点は、支那の地図を拡げたり、速記をよみ直してもらつて万全を期する。

ならば、このようにして構想・執筆・発表された「花と兵隊」は、発表当時、どのように読まれ、また、今日どのように評価されているのだろうか。次節ではそのことを検討していきたい。

Ⅲ

まず、「花と兵隊」に関する先行研究から検討していこう。

亀井勝一郎は、「花と兵隊」を《戦場における言わば日常性の記録》と捉えた上で、中国人表象について次のように述べる。

当然のことながら被占領国民としての当時の中国人の様々な生活も描かれている。日本人と中国人の交わりが始まる。そこに生じた恋愛や滑稽さや卑屈さや、また信頼していた召使の中国人がスパイであったり、様々の小事件を短篇風にならべた一系列の作品である。

さらに、『中国遊記』でも呼びたいような「のどけさ」、《死と死の谷間にひろがった生の屈托のない楽しさ》を以て、『はじめて戦陣にのぞんだときの緊張と切迫感をもった「土と兵隊」とはあざやかに対照的な作品』と、『兵隊三部作』に位置づけている。

「麦と兵隊」、「土と兵隊」について『人間の本质をみつめる彼のまなざしは共感にあふれていた』と高く評価する川本彰は、しかし『花と兵隊』における火野はすでに「観念の奴僕」となっていた」と、その変化を指摘し、次のように批判していく。

『花と兵隊』には、観念的、図式的、国内宣伝用のきらがある。綺麗事すぎるのである。いずれの登場人物にも、いわば生命が通っていない。観念的な人物ばかりである。^⑩

つまりは、当初からそう、^⑪した枠組みの中で公表された火野の『兵隊三部作』ではあるが、前二者に比して「花と兵隊」は現実性が後退し、その分、国策との距離が近接しているというのだ。こうした見解に対置するように、次に引く長野秀樹は具体的な作中の挿話にふれつつ、同作に「人間（性）^⑫」を見出している。

この「奇蹟」（飛躍的な読み書き能力の向上／引用者注）の一つが中国女性との恋のために、中国語に長足の進歩を見せる「粹主義者」の兵隊であり、息子に手紙を書くために字を覚える母である。その一つを「語学について」と題して、火野は同列に語るのである。そこには「愛情」という人間の感情について、国や民族の違いはないはずだという火野の考えが働いていることは間違いないだろう。こうして火野は、戦争という巨大な歴史の運動の中に、逆に微視的な日常性の原理を持ち込むことで、戦争が日常と化した兵隊の姿を描き出して行く。^⑬

ここで長野は、『兵隊三部作』に通底する戦場の日常というモチーフを指摘しながら、「花と兵隊」に『国や民族の違い』をこえた『人間の感情』を指摘している。具体的には、日本（軍人・男性）と中国（民間人・女性）の関係（恋愛）を描いた「花と兵隊」後半のモチーフを、好意的に捉えた評言だといえる。

この論点には、成田龍一も注目している。『占領の様相を描いた小説『花と兵隊』でもっとも特徴的なことは、さまざまな中国人が登場し、彼らと「私」たちが関係をもつこと』、『中国の街にぎわいが記されていること』だと指摘した上で、成田は次のようにしてそこに書かれた恋愛の様相に権力関係を見出していく。

河原／鶯英というくみあわせは、侵略者の男性／被侵略者の女性のくみあわせということであり、植民地支配の典型的な構図となっている。「外部」からやってきた支配者が、「内部」の住人を無力化し従属させるという力関係が、男性／女性の関係に重ねあわされているのだ。

以上を総じて、「花と兵隊」については国策イデオロギーとの距離が陰に陽に評価軸として敷かれた上で、戦場の日常というモチーフにおいて書かれた日本人／中国人、男／女の関係性が争点となってきたのだ。また、作品評価は、争点に対する著者のスタンスによって賛否が割れたまま今日に至っている。その争点も、日本人と中国人の恋愛が書かれたゆえそこに集中した感があり、他の重要なモチーフが十分に議論されてきたとはいいたい。従って、作品評価の前提がまだ整っていないのが現状である。

次に同時代評を検討していく。それは、火野葦平の渦中の出来事であり、それゆえ、「花と兵隊」は発表前からあの火野葦平の新作として期待と注目を集めていた。十返一「本年文壇回顧」(『文藝汎論』昭一三・一二)に、次の作家論的評価がある。

圧倒的な成果を呈した「麦と兵隊」につづけて火野葦平は、十月号の文藝春秋に再度二〇〇枚の「土と兵隊」を発表した。きけば更に「花と兵隊」を書き三部作とするといふことである。このエネルギーシユな製作行為は内地にある作家達に一脈の恐怖感を、どこからともなく与へずにはゐないであらう。而も対象に対する筆者の態度には微塵の混迷もなく戦火の唯中に客観する眼を持ちつゞけてゐるところ誠に偉とせざるを得ぬ(三二頁)

併せて、火野作品のセールズに注目した、J・I・N「匿名時評 文芸 新春文壇」(『日本評論』昭一四・一)も引いておく。

最後に、火野葦平の兵隊三部作の最後の作「花と兵隊」は朝日新聞が獲得したことを報告して置く。最初の作品「麦と兵隊」は「改造」が獲得して、菊池寛をカンカンに怒らせた。芥川賞作家の第一回作品だから当然「文藝春秋」のものだといふ訳である。そこで第二作「土と兵隊」は「文藝春秋」で獲得した。「麦と兵隊」の載つた「改造」は大変な売行だったが「土と兵隊」を載せた「文藝春秋」も凄く売れた。雑誌だけで足りないで、それぞれの単行本がまた大変な売れ方だ。そこで第三作はどこへ行くかが興味の的だったが、遂に朝日が獲得した。「改造」や「文藝春秋」としては、まるで大損をしたみたいに口惜し涙にくれてゐることだらう。これで見ても、新聞社の力といふものが、雑誌社の力より比較にならぬほど大きいことが分る。ともあれ「花と兵隊」は今年の最も大きな楽しみの一つである。(二二四頁)

ここには、火野作品が争奪戦の様相を呈したことが確認できるが、併せて、こうした火野をめぐる楽屋裏が言表される価値をもっていたこともわかる。ところが、「花と兵隊」連載開始後の同時代評では、総じて評価が低い。(もちろん、新聞連載小説が月評で論及されること自体、注目を集めていた証左ではある)。

さて、早くは青柳優「文芸時評 戦争小説について」(『早稲田文学』昭一四・一二)が連載中の「花と兵隊」に論及する。

火野葦平氏の「煙草と兵隊」東京朝日連載の「花と兵隊」は、戦争が日常茶飯事となり、兵士達が戦争に馴染んで了つ

たところから出発する、新しい驚きとその意味での通俗平凡な落着きとを描き雑ぜた印象を与える。火野氏の作品も徐々に転換とマンネリズムの時期を経過しつゝ、ある様に思はれるし、氏の作品の判つきりした批評もこれからであらうと思ふ。

(一六五頁)

戦場の日常というモチーフを指摘した上で、青柳は作品の評価を留保している。そればかりか、同文は廻行的に火野作品への『批評』を期待し、喚起する言表となっている。こうした姿勢は、次の評にも共通している。浅見淵「文芸時評」(2)二つの戦争小説」(『信濃毎日新聞』昭一四・二・二三)を次に引いておく。

この一文(『東莞行』／引用者注)を読んで、同時に「花と兵隊」といふ作品を読みながら感じたことを憶ひ出したが、火野葦平が次第に作家的余裕を獲得すると共に、書くものが、へんに間延びがして来て、悪達者なユーモアだけが次第に目立つて来たといふ事である、つまりその中に、感動的なベイスを織込むことによつて効果を挙げるといふマンネリズムが、意識的にか無意識的に出来て来てゐるのだ。真の戦争小説の困難は茲にもひそんでゐる。(一六六頁)

ここで浅見は、最近の火野に『作家的余裕』と同時に『マンネリズム』を指摘する。もちろん、火野を酷使したのはジャーナリズムでもあり、そのことに同情的な、次に引くX・Y・Z「スポツト・ライト」(『新潮』昭一四・三三)のような声もある。

いつたい日本のジャーナリズムでも、出版界でも、その流行が、とかく一方に片寄るクセがある。「略」斯くて日日新聞には「海と兵隊」が載れば、朝日新聞には「花と兵隊」が

載るし、主婦之友には「妻と兵隊」までが載るといふことになるのである。が、これはどうも、余りいい傾向とは言へない。一人の作家をすべてのジャーナリズムが寄つて、たかつて食ひものにするのである。火野氏は戦地で働いてゐる軍人である。いくら執筆の時間があるとしても、こんなにも方々で書かせるのは、少し気の毒ではないか。(二六六頁)

ただし、これは火野に同情的な言表で、読者からすれば厳しい評価もやむを得ない。幾山河「豆評論 明日の戦争文学」(『信濃毎日新聞』昭一四・二・二五)には、次の論難がみられる。

▼火野葦平も「花と兵隊」「海と兵隊」を書くに至つて聊か食傷のていである。「花と兵隊」「海と兵隊」が前作「麦と兵隊」「土と兵隊」より文学的に優れてゐるのならとに角、いやに大家然として来てしまつて一兵隊一人間としての赤裸なものが余程なくなり、筆ばかり達者に運ばれるので面白くなくなつた。「麦」「土」に見られる神々しさの代りに、戦争文学ずれた火野を見るに至つて読者は顔をそむけ出した。

(一六六頁)

ここでは、量産だけでなく、それに伴う火野の作風の変化が論難されているが、これは当初からの火野の企図でもあった。

火野としては、新たな領野を切り開いたつもり「花と兵隊」が、おそらくはそれゆゑに批判されていく現実にあつて、同時代評として提示された二つの処方箋がある。一つは天地人「豆評論 葦平文学は何処へ」(『信濃毎日新聞』昭一四・三・一〇)で、

▼火野がルポ書きとしての人気は落ちても、彼ほどのものが、戦場を離れて今後どんな文学を生むか天下の関心の集中されてゐ

る》、《あれだけの偉材が戦争文学以外の天地に踏こめない筈はない》(四面)という、さらなるモチーフの変更である。もう一つは、宇野浩二が「文芸時評」(3)「二種の戦争文学」(「読売新聞」昭一四・五・三夕)で示した、次のようなものである。

火野の文学の中に初めから何か危な気があるのが気になつてゐた私は、「海と兵隊」以後の作品を読んで「略」火野の文学に余り感心できない調子がつき出したのを見て、近頃は幾らか(可なり)落著ける所にあるといふ火野に少し落著いて慎重に仕事をしは、と切に望みたいのである。(二面)

ジャーナリズム(陸軍)の仕掛けもあり、「麦と兵隊」の際には、戦場で時間的余裕のないままに書き、発表されたがゆえに評価されたあの作家が、一年もたたないうちに、ルポルタージュの迫真性とは相容れない《慎重》さを要請されるに至っている。

こうした火野評価の低下は、この時期、不可逆的に進行しており、皮肉にも、新聞に発表された「花と兵隊」(と「海と兵隊」)が、そうした評価の主な根拠とされていったようである。そのこととは、次に引くD「閃光 短篇小説全盛期を迎へるか……」(「国民新聞」昭一四・七・一二)において端的に語られている。

一時流行のトップを切つてゐた戦争文学と云つても戦線ルポルタージュ(従軍観戦記に過ぎないが)は早くも凋落の色が濃い。「麦と兵隊」で売出し「土と兵隊」と真実味を發揮した葦平文学も「花と兵隊」「海と兵隊」等々となるに及び遂に大衆から突き放されてしまったこれは作者の未熟の故か、ジャーナリズム宣伝の罪か或は読者のあきつばさに依るか兎に角慌たしい現象ではある(六面)

そもそも、戦争文学／ルポルタージュの混乱、火野作品を一方的にルポルタージュと見なしての批判など、乱暴な議論ではあるが、これもまた同時代における火野葦平理解の一つではある。もちろん、同時代に言表されただけでも、ことは作家の問題ばかりでなく、モチーフ・作風の変化、読者、ジャーナリズム(期待／酷使)との相關関係の帰結として、評価が変じていったのだ。

その後、『花と兵隊 杭州警備駐留記』(改造社、昭一四・八)が刊行されるが、その際のパラテクストもみておこう。

改造社の広告「花と兵隊 火野葦平著」(『文藝』昭一四・九)では、『葦平戦記の三部作』、『花と兵隊』は私の今までの戦記ものの、うちで最も骨を折つたものだと言ひました。といつたコピーとあわせて、次のような広告文が掲載されている。

『土』『麦』の二作が凄絶な戦闘・進撃と言つた生死ギリギリの時間における兵隊の魂の発展史ならば、これは戦塵遠き江南の風光に擁かれた駐留警備の兵隊の心の抒情詩だ。頑敵と一歩もひかじと死闘して来た兵隊も、ここでは一人々々が優雅な日本の心を連ねて民衆の生活の中へ流れ入り、西湖に水もぬるめば姑娘の運歩に青春の夢を追ひ、杭州の花蔭に隣那知識人らと東洋の運命を語るのだ。大陸に建設の銃を握つて冬を越し、雪を割る一茎の花に亜細亜の春遠からじと思ふ兵隊の心が銃後一億の心にしみじみと通ふ名作。(折り込み・頁表記なし)

ここでは、「麦と兵隊」、「土と兵隊」を《兵隊の魂の発展史》、対する「花と兵隊」は《兵隊の心の抒情詩》と評して、兵隊三部作“中の特異性が打ち出されている。版元の雑誌に掲出された

無署名「出版だより」(『文藝』昭一四・九)も次に引いておく。

火野葦平氏の「花と兵隊」が愈々出来ました。これで葦平の「我が戦記」三部作が完成された。「花と兵隊」は杭州警備駐留記。敗残兵や便衣隊の出没はあつても麦や土の如き進撃や激闘はないが、多くの支那人との接触があるのが特徴だ。

一つの戦闘が済んで次の戦闘に移る迄の滞陣中の兵隊の心の動きや、行動や、生活を描いて見たいといふ著者の意図がすばらしく成功してゐる。三部作中最も場面も人物も多彩な大作です。装幀は中川一政氏、挿絵は中村研一氏。(二一七頁)やはり「麦と兵隊」、「土と兵隊」と差異化しつつ、「花と兵隊」は《多くの支那人との接触があるのが特徴》だとされている。

こうした「花と兵隊」の性格づけは、しかし火野の当初の企図に沿うものであり、また、同時代評でそのように読まれてきた受容とも重なる。従つて、杉山平助が「火野葦平論」(『改造』昭一四・一〇)で次のように評すのも、ごく自然ではある。

「花と兵隊」は、彼の従軍作のうち、最も文学的なものであり、彼もおそらく最も文学的に骨を折つたものであらう。そこには仮構の感じられるやうな弱い部分もあるが、しかし、いつたいには充実して、のびのびと逞しい。兵隊服を着せられた彼が何とか、本来の芸術家としての芸術に帰りたいといふ郷愁のやうなものが感知される。(三二四頁)

これは、火野によりそい、その文学性・芸術性を評価した一文ではあるが、文学場の期待と齟齬を来したがゆえに、低評価となつたことはすでに検証した通りである。廣津和郎・保高德蔵「上田廣帰還座談会」(『文藝』昭一五・二)では、その文学性すら、『書

かされてをる』がゆえに物足りなく感じられている。

保高 「花と兵隊」を／引用者注)読んで見て、面白いことは面白いです。いろ／＼警備地の状況とか、兵隊の模様がよく判るのですけれど、しかし、あれは日記のやうにして書き綴つた感じね。

廣津 やつぱり少々書かされてをる感じがあるでせうね。
保高 さう／＼。(二〇四頁)

これらを総じて、《▼「麦と兵隊」以下の「一と兵隊」ものでも一世を我もの顔にした火野も「花と兵隊」あたりから飽きられて来てゐる形》(幾山河「豆知識 気短かな戦争文学の流行」、『信濃毎日新聞』昭一四・一一・二二、六面)ということになるが、年次総括をみると、「花と兵隊」が一定の存在感を示していたことも間違いない。河上徹太郎「今年の文壇への回想(一) 明暗二様の感想」(『東京朝日新聞』昭一四・一二・一〇)には、次の一節がみられる。

それ(本年度の文壇／引用者注)は全く文運隆盛といふ御芽出度い四字に尽きる。昨年度から持ち越した戦争文学、従軍文学が漸く本道に入つて、火野葦平氏の三部作は、最後の「花と兵隊」が本年の初頭に現れたし、昨年の漢口攻略に大挙従軍した文士達の仕事も、材料本位の報告や日記から転じて、漸く長篇の中に盛り込まれるやうになつたし、一方日比野士朗氏の「呉淞クリーク」も出た。(七面)

昭和一四年の文学場の動向として、『戦争文学、従軍文学』がまずは論及され、具体的な作家・作品名として火野葦平「花と兵隊」があげられている。細かい賛否とは別に、文学場の成果とし

て逸せない、という判断にみえる。もちろん、次の徳田一穂「嵐の中の無風帯 文壇一年の回顧（一）」（『信濃毎日新聞』昭和一四・一二・二〇）のように、否定的にとりあげられたこともある。

火野葦平氏は「花と兵隊」「海と兵隊」「煙草と兵隊」等を書いてゐるが、去年の「麦と兵隊」「土と兵隊」の二つの製作に比較して今年の諸作品は甚しく見劣りがするといつてよからう。（四面）

以上、同時代評分析を総じて、「花と兵隊」は火野葦平の新作として、また昭和一四年の代表作として注目を集め、一定の評価を得てはいた。ただし、前二作と比べれば評価の低下は明らかで、その要因としては、モチーフの変容、それに伴う火野に対する読者の期待とのズレ、ジャーナリズムの酷使によつて火野がマンネリ化して映じたことなどが考えられる。逆に、初出紙で読んだ際、火野の企図でもあり、挿絵の効果も含め、クローズアップされていることが明らかな西湖を中心とした中国の景観に関する議論は、同時代評／先行研究いずれにも論及がなかった。

IV

「花と兵隊」について、書誌の観点から第一に確認しておくべきなのは、新聞連載がそのまま単行本化されたわけではない、ということである。本文異同にくわえ、この連載は二つの作品にわけて書籍化された。著者自身は次のように述べている。

「花と兵隊」は百三十回、昭和十四年六月二十四日、土曜日の夕刊を以て完結したのである。その後時を置いて、続篇と

して、さらに、三十回を書きついだ。しかし、その続篇は、「花と兵隊」を単行本にするときには省き、別に「兵隊について」（昭和十五年十二月）という題にして、やはり、改造社から刊行した。¹³

記憶違いかと思われる部分もあるので、以下に確認しておく。

新聞連載状況からいえば、昭和一三年二月二〇日づけの夕刊から、東京／大阪の両「朝日新聞」で始まった「花と兵隊」は、休載日を異にしながらも、それぞれの一〇一回目が昭和一四年五月七日に掲載され、ここまですが『花と兵隊』（改造社、昭一四・八）として単行本化される。ただし、「花と兵隊」というタイトルの連載は、両紙とも一〇日間の休載を経て、五月一八日づけ夕刊一〇二回目から再開されていく。ここから、やはり休載日を異にしながら、『東京朝日新聞』では六月二四日づけ夕刊まで、『大阪朝日新聞』では六月二七日づけ夕刊まで、二九回連載がつづき、双方二三〇回を以て連載終了となっている。この二九回分については「兵隊について」と題され、単行本『兵隊について』（昭一五・一二）に収録される。ちなみに、初出連載時、第一回／第二八回まで「敵国の春」と題されていた章題に関しては、初刊単行本では、第一回／第三回分は「雪深く」と改題され、第一四回／第二八回までが「敵国の春」と題されていた。

総じて、新聞紙面を見る限り、タイトル、通し回数、挿絵画家等、いずれも二二〇回を二作品として扱っていることは明らかで、これまでの研究史では初出が問題化されてこなかった。

以上の事実をふまえ、初出「花と兵隊」と単行本『花と兵隊』の間の本文異同についてふれておく。全体としては、政治的な表

現や軍関連の情報まで含め、大きな異同はない。その反面、細かな異同は多々あり、それは主にⅡでふれた執筆事情に由来するものだとみられる。頻出する異同としては、漢字・平仮名等の表記、句読点、改行箇所、直接／間接話法等に関する変更がある。

いくつか例示しておく。初出第二回、「嘉善」以下、二〇の地名が列挙される箇所に関して、初出では読点で追いまれていた地名が改行された他、「慈湖鎮」が「慈古湖鎮」と改められ、「水郎溪」が削除された（昭一三・一二・一二夕／七―八頁）。また、少しく戦況に関わる箇所として、二つ紹介しておく。

負傷者が傷々しく白い繻帯に「つ、」包まれて、前線から「われわれ」我々の宿舎の前を通つて帰つて来る姿も見られた。▽濱田少尉は、私に数度、近く討伐に出なければならぬと語つたが、私「たち」達の部隊がいよ（く）いよ討伐隊として出発する日もそんなに遠くないやうに思はれた。（昭一四・三・一〇夕／一六一頁）

*

杭州奪還の夢が過ぎた頃、私達の部隊に警備の「移」異動があつた。八田少尉の「第〇」小隊は杭州市から二里ばかり離れた奏帝山附近の警備に「就」つき、中山「少尉の第〇」小隊は杭州駅の「直」すぐ前にある兵站衣料廠の警備隊となつた。湖濱路の我々の兵営には、中隊本部と「」我々の「第〇」小隊のみが残されたのである。（昭一四・四・二七夕、二五〇頁）

こうした箇所は、軍務に関わる具体的な情報ゆえの削除にみえる。逆に、初出では書かれなかった情報の加筆もみられる。

今日は美しい西湖の畔にあつて「話」花を楽しんでゐる「」。兵隊は面白いぢやないか。昨日は乞食のごとく、碌にものも食わずに泥たんぼの中にゐたのに、今日は、王侯のやうに、煉瓦とマホガニーの建物に住み、模様のある絹の蒲団に丸々と暖まる。（昭一四・三・一五夕／一六八頁）

これは作中人物の台詞の一部が加筆されたケースである。他には、フレーズの入れかえに、作者自身も事後的に知つた可能性のある情報が加筆された、次のようなケースもある。

青蓮は「なに」何か敬虔な面持を「湛」たたへてその墓の頭を静かに何度も撫で廻した。「〇」私にはそれが少し「可笑」おかしかつた「のだが」。後になつて知つたのだが、蘇小小の墓の頭を撫でると美人になるといふ伝説があるさうである。或ひは撫でれば、思ふ人に会へるとも、よい子が生まれるともいふ。それで、このセメントの墓のいただが、こんなに光つているのである。「その墓の頭を静かに何度も撫でまはした。それから」堂宇を出た私達は湖辺にある、ベンチに腰を下した。（昭一四・四・一五夕／二二四頁）

河原と鶯英同様、私と青蓮に関しても、日本人男性と中国人女性の恋愛めいた関係が描かれており、当局からの注意があつた（Ⅱ参照）ことから、初出時には筆を控えたのかもしれない。

総じて、右のような異同は散見されるものの、いずれも作品像／評価の変更を必要とするレベルのものではない。

最後に、これまでほとんど論及されてこなかった、しかし、当時（文学場）／現在（研究状況）において重要だと思われる「花と兵隊」の物語内容について、少しく分析しておきたい。

これまで、戦場の日常というモチーフ、中でも日本人男性と中国人女性との恋愛関係は一定の注目を集めてきたが、この論点を深く掘り下げていくことで、^{「フィクション」}交、通^{「フィクション」}という「花と兵隊」の最も挑戦的な試み、主題にまで測鉛を下ろすことができる。

そうした主題がさりげなく示されるのが「敵国の春」中で、中国人の物売りがやってくることを描いた際の次の一節である。

竹籠に、野菜、大根、赤い〔円〕丸い大根、蕪〔等〕などを山盛りにして、奇妙な〔か〕掛け声に似た売り声を〔た〕立てながら早朝からやつて来る。〔略〕ところが、この取引は〔中々〕なかなか困難を極める。第一に言葉が通じない。〔然〕しかしながら〔奇〕機智に富んだ兵隊はさして不自由もなさうに身振りや〔一〕手真似でこれを克服する。第二は貨幣問題である。我々は支那貨を持たず、支那人は未だ我々の日本金に対しては不安であつて、光輝ある我〔等〕々の貨幣を〔決して〕受け取らない。かくて交易は必然的に原始の昔に〔還〕返つた。(昭二三・一二・二五夕／一九頁)

ここにはさまざまな種類の^{「フィクション」}交、通^{「フィクション」}が描かれているが、「花と兵隊」においては、恋愛や戦争もまたその変奏として読める。たとえば、戦場を行軍する兵隊達は中国語を避けて通れない。

兵隊は誰も不便なので、日用語だけでも知らうと努めてゐた。

〔一〕た〔一〕だ河原上等兵だけが、さういふ兵隊の努力を笑つた。征服した支那の言葉を、勝利者である日本の兵隊が覚える必要はない〔一〕。あくまでも多少の不便を忍んで日本語で通すべきである。さうすると支那人の方が必ず日本語を習ふやうになり、一切のことは〔われ／＼〕我々の言葉で通

じるやうになるのだといふのである。〔二〕それは学説としては皆から首肯されたが、当面の問題としては少しばかりの支那語を知つてゐないと、どうにも不便だつたのである。(昭一四・一・一四夕／四七―四八頁)

もちろん、河原のような発想もあり得るのだが、「語学について」という章をもつ「花と兵隊」において、日本語の問題は重要なモチーフをなしている。その河原は驚英と恋に落ち、中国語を習得する。その後、結婚も考える河原は、上官の「私」に対し関係の是非を問う。「私」の返答は、次のようなものである。

話によく解つた〔一〕。〔略〕我々はなるほど現在は支那と戦争をしてはいるけれども、その戦争の目的はた〔一〕だ徒らに人間同士が殺し合ひ、憎しみ合ふことにあるのではない〔一〕。我々はより一層両国民が手を握り合ふために、云はば兄弟喧嘩をしてゐるやうなものだ〔一〕。我々は現在ですら支那の軍隊とは銃火を交へながらも、支那の民衆とは融和して行かなければならぬ立場にある〔一〕。自分はその意味で君とその仕立屋の娘とのことが、唯、相手が敵国の女であるといふことに依つて〔非〕批難されるとは思はない〔一〕。(昭一四・三・二九夕／一九九頁)

こうして、個人レベルでの恋愛・言語の^{「フィクション」}交、通^{「フィクション」}にくわえ、当の戦争も日本と支那の^{「フィクション」}交、通^{「フィクション」}に向けての一階梯と位置づけられていく。もとより、日本人間でも、手紙による^{「フィクション」}交、通^{「フィクション」}を通して読み書き能力の向上が喚起・実践され、戦場と内地が媒介され、「私」は「各処において起る語学の不思議」に感慨を抱く。中村上等兵の母親は息子が出征するまでは、全く一字も知ら

なかつたといふのである。〔〕私は人間の愛情が如何なる奇蹟をも次々に成就してゆく「様」さまに、胸締めつけられる思ひであつた。〔〕私は「」私の母から来る平仮名ばかりの手紙に、この間から目に見えて漢字の増してゆくのに驚いてゐる「」。「略」このやうなことは、私「たち」だけに起つたのではなく、私は同じやうなことを兵隊「たち」達からも聞かされた。(昭一四・四・五夕／二〇七—二〇八頁)

「花と兵隊」に関して特に重要なのは、こうして各所で展開される「交」通「を成立させる要件・急所として、人間(性)」が前提とされている点である。これは、日本の立場から日中戦争を正当化する論理とも通底しており、また、日中開戦以降に書かれた広義の戦争文学を顕揚する際の最重要語彙でもある。

こうした「交」通「の様相をふまえた上で、「花と兵隊」中で、中国人の登場人物が語る日中戦争の意義を、その代表例として「私」と親しくなつた肅青年の発言を通して検証しておく。

「私」からしてみれば、敵である日本軍に与する中国人は不思議な存在に映じているのだが、それに対して「中国は決して不真面目なのではない」という肅青年は、次のように語る。

中国はほん「た」□うに新らしくならなければならぬといふ熱意に燃え盛つてゐます。その方法が見つからなかつた。

日本と戦争をはじめた。それは中国の更生のために、あまり手際のない方法ではなかつたかも知れない「」。しかし、結果においては、最も手際のない方法であつたかも知れないと「」。私は思つてゐます。(昭一四・三・二三夕／一八五頁)

こうして戦争を一応は肯定する肅青年は、さしあたり高次の意

義を「中国の更生」においていたが、その射程はさらに広い。

私「たち」達青年は、皆、今や混乱の最中ゐます。「略」しかしながら、私「たち」達は新しい中国の建設のために、この道を道を進まねばならないと決心したのです。日本軍と結ぶ私「たち」達は漢奸といはれ、常に刺客の剣の下にゐます。しかしながら、私「たち」達は新しい中国の建設のために、「ある」或ひは東洋の更生のために、この荆棘の道を進むつもりです。(昭一四・三・二四夕／一八七頁)

こうした中国人による、日中戦争を介して「東洋の更生」を目指すという弁証法的な論理構成は、「花と兵隊」で日本人兵士が提示する戦争の意義と、「人間(性)」を基盤として重なる。その一例として、日本人の青柳伍長による次の発言を引いておく。

戦争は人間が集「ま」つて作つてゐる国と国とが戦ひ、戦場では人間と人間が戦ふ、それは甚だしく「狂気」気狂ひで見えるが、それはやつぱり人間によつて行はれるものだ。人間が新しい人間の道を探す「」人間としての戦ひだ。「略」俺にはこの人間の成長が楽しみだ。「」ところがこの人間の成長は何かの心の中の戦ひによつて、一層完成されなければならぬ「」。「略」兵隊は戦場で銃を把つて戦はなくてはならぬ。同時に心の中の戦ひが「為」なされなくてはならぬ「」。常に反省がなされなくてはならぬ、その反省が「」人間を本当に鍛へ、本当に人間を反省し、日本を美しくすること「が」だ。(昭一四・三・一五夕／一六八頁)

こうして、この戦争の根底に「人間(性)」が担保され、日本人登場人物を介して日中戦争が肯定され、しかもそれが日本

国家の審美性へと回収されゆく回路が提示されている。従って「花と兵隊」とは、日中両国人が東洋の未来を、人間としてともに語る場面が書きこまれた戦争文学ということになる。もとより、日本人兵士と中国人女性の恋愛も、こうした問題含みの人間(性)^{ヒューマン(性)}を前提とした交^{マユ}通^{ツウ}によって成立している。となれば、初出版「花と兵隊」研究をめぐる次の課題(の二つ)は、国籍／性別を異にする人物が織りなす交^{マユ}通^{ツウ}の諸局面がどのように書かれたか、言語表現／挿絵の両面から、紙背／作中世界の権力関係に配慮しながら検討していくことであろう。

注

- (1) 拙論「戦場にいる文学者」からのメッセージ——火野葦平「麦と兵隊」(『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』立教大学出版会、平二七)、同「火野葦平「土と兵隊」の同時代的意義——日中戦争期における文学(者)の位置」(『立教大学日本文学』平二八・一) 参照。
- (2) 中村研一の挿絵については、他日別稿を期したい。
- (3) 火野葦平「解説」(『火野葦平選集 第二巻』東京創元社、昭三三)、四二九—四三〇頁。
- (4) 注(3) に同じ、四三〇頁。
- (5) 注(3) に同じ、四三〇頁。
- (6) 注(3) に同じ、四三四頁。
- (7) 注(3) に同じ、四三二—四三三頁。
- (8) 新延修三「火野葦平」(同『朝日新聞の作家たち』波書房、昭四八)、一六〇—一六一頁。
- (9) 亀井勝一郎「解説」(火野葦平『兵隊三部作』雪華社、昭三

七)、三二二—三二三頁。

- (10) 川本彰「太平洋戦争と文学者——軍政下における火野葦平・井伏鱒二について——」(『明治学院論叢』昭五五・三)、三三三頁。

- (11) 長野秀樹「具体的な現実」の諸相——兵隊三部作論」(『敍説』平八・八、六一頁。

- (12) 成田龍一「増補 〈歴史〉はいかに語られるか 一九三〇年代「国民の物語」批判」(ちくま学芸文庫、平二二)、一七〇頁、一七七頁。

- (13) 注(3) に同じ、四三三頁。

- (14) 引用末尾のバーレン内には初出の掲載日／初刊単行本の頁数を略記する。初出と初刊単行本間の異同については、削除された部分は「」で囲み、加筆部分には傍線を付して示した。

- (15) 注(1) 参照。また、人間(性)^{ヒューマン(性)}は上田廣「黄塵」受容に顕著な語彙である。これについては別稿を準備中。

※「花と兵隊」引用に際してはルビを省略し、また「略」記号による省略は引用者による。なお、本研究はJPS科研費16K02420の助成を受けたものである。

(まつもと かつや・神奈川大学外国語学部准教授)